

2026 年 10 月 19 日

立教大学国際学術研究交流制度
2026 年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	異文化コミュニケーション学部・教授
氏名	イ ヒャンジン
派遣機関名	Im Kwon Taek College of Film and Arts, Dongseo University 所在国：韓国
研究テーマ	グローバル・ストリーミング時代における韓国・北朝鮮映画の再編：ナショナルからポストナショナルへ
派遣期間	2026 年 9 月 16 日～2026 年 10 月 16 日（31 日間）
研究経費	577,410 円

2. 派遣期間中の活動

離日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。
活動内容記入例）〇〇に関する調査、〇〇氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

年月日	活動内容
2026/09/16（水）	離日
2026/09/16（水）	韓国到着
2026/09/17（木）	東西大学校・林権沢映画芸術大学のキム・ジョンソン教授と面談し、派遣研究計画について協議。
2026/09/18（金）	釜山国際映画祭マーケット委員長のキム・ヨンドク氏にインタビューし、研究テーマに関連する映画産業の最新動向について聞き取り調査。
2026/09/19（土）	建国大学校のシン・ジホ教授と共同研究を協議し、釜山市立美術館での展示について報告を受ける。
2026/09/21（月）	延世大学尹東柱記念館後援会長のパク・ウングァン氏および遺族のユン・インソク教授と面談し、今後の尹東柱研究について協議。
2026/09/23（水）	東西大学校のチャン・ジェグク総長と面談し、MOU 締結の打診を受け、両大学間の連携について協議。
2026/09/29（火）	東西大学校・林権沢映画芸術大学院を訪問し、共同研究や異文化コミュニケーション研究科との学生交流・連携について協議。
2026/09/30（水）	映画の殿堂シネマテークのユ・ジュヒ課長と、11 月のテオ・アンゲロプロス監督特集（自身がプログラマーを担当）について協議。
2026/10/1（木）	南川文化村での現地調査および地域芸術家へのインタビュー。
2026/10/3（土）	釜山ビエンナーレ展示会場の視察・資料調査。

2026/10/4（日）	釜山国際映画祭理事長のパク・グァンス監督と面談。
2026/10/6（火）	釜山国際映画祭の開幕式に参加し、ゼミ合宿参加学生と現地で合流。日程調整や参加登録等を指導。
2026/10/7（水）	FILMLAND MV 代表の Volker Kufahl 氏と面談し、来年度の映画祭への招待を受け、プログラムについて協議。
2026/10/8（木） ～2026/10/10（土）	東西大学校・林権澤映画芸術大学院の大学院生と立教大学異文化コミュニケーション研究科のゼミ合宿参加学生による合同研究会、および映画鑑賞後の討論。
2026/10/15（木）	釜山旅行特攻隊・21 未来フォーラム代表のソン・ミンス氏と面談し、朝鮮戦争避難民の居住地域や映画ロケ地の現地調査について協議。釜山国際映画祭閉幕式に参加。
2026/10/16（金）	日本へ帰国。

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

今回の派遣研究では、東西大学校・林権澤映画芸術大学を拠点として、韓国・朝鮮映画の歴史の変容、分断と冷戦の文化的・感情的遺産、グローバルな映画流通とメディア環境の変化を中心に、資料収集、作品調査、専門研究者との学術交流を実施した。特に、韓国・朝鮮映画をナショナル／ポストナショナルという枠組みから比較分析するため、映画テキストと制作・流通制度の双方に関する最新の資料と情報を収集し、研究の実証的基盤を充実させることができた。

釜山国際映画祭では、作品鑑賞と関連資料の収集に加え、映画祭理事長の朴光洙監督、アジアコンテンツ&フィルムマーケット（ACFM）のキム・ヨンドク委員長をはじめ、国内外の映画祭・映画産業関係者との面談やインタビューを実施した。韓国映画の制作・配給・国際流通、映画祭の役割、OTT プラットフォームの普及に伴うメディア環境の変化について現場の視点から情報を収集し、国家による制作・流通管理が続く朝鮮映画との比較分析に必要な知見を得た。また、研究者との意見交換を通じて、分断表象、冷戦の記憶、ジェンダーや感情構造に関する分析視点を検討し、研究の理論的枠組みを精緻化した。

本研究の成果は、オックスフォード大学出版局（Oxford University Press）から刊行予定の『The Oxford Handbook of Korean Cinema』に収録される論考「North and South Korean Screen Cultures in the Post-National Era」に反映させる予定である。同論考については 2026 年 5 月に出版契約を締結しており、今回の派遣研究では、特に韓国映画の産業構造と国際流通、映画祭とグローバルなメディア環境の関係について資料収集と分析を進めた。

派遣先との研究交流においては、東西大学校・林権澤映画芸術大学との継続的な共同研究および大学院教育交流に向けて、具体的な成果を得ることができた。同大学の研究者と研究課題や今後の協力について協議するとともに、立教大学異文化コミュニケーション研究科のゼミ合宿参加学生と東西大学校の大学院生による合同研究会を開催した。釜山国際映画祭での共同作品鑑賞と討論を通じて、両大学院の学生が研究関心と映画分析の視点を共有する機会を設けた。

この交流の成果を踏まえ、2027 年度以降も両大学院による合同研究会を継続的に開催することを決定した。さらに、東西大学校の張済国総長との面談では、立教大学との MOU 締結について提案を受け、大学間の学術協力の可能性を協議した。今後は、両大学の関係部局と調整を進めながら、大学院合同研究会の定期開催、研究者間の共同研究、学生交流を継続的に発展させていくことを目指す。

また、国内外の映画祭・シネマテークとの研究交流も進展した。映画の殿堂シネマテークでは、自身がプログラマーを担当するテオ・アンゲロプロス監督特集について協議し、2026年11月下旬から12月中旬にかけての上映が決定した。ドイツのFILMLAND MV代表Volker Kufahl氏との面談では、2027年の映画祭への招待を受け、今後のプログラムおよび参加の可能性について協議した。こうした国際的な研究・文化交流は、映画資料や研究情報の共有を促進するとともに、韓国・朝鮮映画を東アジアの分断と冷戦の歴史的文脈から、より広いトランスナショナルな映画文化のなかで考察するための研究基盤を拡充するものである。

さらに、映画文化と地域社会の関係についても現地調査を実施した。釜山の文化地区、朝鮮戦争避難民の居住地域、映画ロケ地、美術館や芸術関連施設などを訪問し、地域の芸術家や文化事業関係者へのインタビューを行った。これらの調査は、映画と都市空間、歴史的記憶、文化観光の関係を検討するうえで有益であり、韓流・Kカルチャー研究への展開にもつながった。この研究の発展として、日本女子大学の平田由紀江教授と韓流・Kカルチャーに関する研究書を共同執筆することを決定し、今回の現地調査を踏まえて出版企画書を作成した。本書では、韓国と日本を横断する文化実践、デジタル・プラットフォームを介した文化消費、人々の移動と交流などを取り上げる予定である。

以上のように、今回の派遣研究では、韓国・朝鮮映画の比較研究に必要な資料収集と分析、専門研究者および映画産業関係者との交流を着実に進め、当初の研究目的に沿った成果を得た。加えて、東西大学校との大学院合同研究会の継続開催の決定、MOU締結に向けた協議、国際的な映画文化交流の進展、共同研究書の出版企画など、今後の研究・教育活動につながる具体的な成果も得られた。

今後は、収集した資料とインタビューの分析を進め、韓国・朝鮮映画のナショナル／ポストナショナルなスクリーン文化に関する研究成果を国際的に発信するとともに、立教大学と東西大学校の継続的な学術協力を推進し、大学院合同研究会を軸とする共同研究・教育交流の体制を発展させていく。



